

震災から1年7か月も経っていて、しかも、わずか2日の滞在で、一体、何がわかるのだろうか？と、半信半疑で参加した東北応援ツアーでした。しかし、その成果は大きく、旅行から帰ってきて、日にちがたつほどに、ジワジワ、私の内部から意識が変わっていくことに気づかされました。

現地に行くことが何より大切だという事を改めて感じ、参加できた幸運を感謝する次第です。

今まで、ただ目の前を流れていた情報が、線として結び合うようになり、現地で体感した空気や思いがそれを肉付けし、次にやってくる情報がさらに枝葉となります。

震災に関する情報に対して非常に感度が高くなり、小さなものまで掬い上げて組み立てるようになりました。

宮城県を訪れたのは初めてでした。

仙台の街はとても活気があり、震災の影はほとんど感じられませんでした。

けれど、南三陸町の防災対策庁舎の前に立った時には、あまりにも生々しい傷痕に、ただ呆然とするだけでした。

今もまだ絶えることなく手向けられるお花や供物。庁舎の周囲は荒れ果てた原っぱのままです。ここだけ時間が止まってしまったような風景に、仙台の街の賑やかさとのギャップを感じ、言葉を無くしました。

同様の思いは名取市でも感じました。道中に残る瓦礫の山、歯抜けになった海沿いの松。

まだ、いたる所に震災の名残があることをガイドさんの説明で知りました。

そんな中で、支援を受けて9月に新工場が完成した『ささ圭』さんのお話は、心にぽっと灯りが灯るような思いがしました。工房を兼ねたお店へうかがったのですが、90歳になれる会長さんが、自ら手ごねの成形作業の先頭に立たれ、お揃いの赤いTシャツのスタッフの方達が明るく立ち働かれる姿は、『ささ圭』さんの作られる"希望"と名付けられた笹かまぼこにこめられた想いと重なり、とても強く心に残りました。